

【はじめに】

「英語学習」と聞くと、何を連想するでしょうか。「難しい」「面倒」「苦手」などなど、ネガティブなイメージを持っている方は多いかもしれません。また、「日本人は英語が苦手」というイメージを持っている方も多いと思います。実際に、日本人の英語力は世界 100 カ国中 55 位とされています (EF EPI 英語能力指数、2020 年版)。「非常に高い」から「非常に低い」の 5 段階レベルの評価では、下から 2 番目の「低い」にあたります。日本人の英語苦手説は、イメージではなく、現実なのです。

ではなぜ日本人は英語が苦手なのでしょう。経済やテクノロジーなどでは大きな成果を収めているのに、なぜ英語となるとなかなか成果が出ないのでしょうか。私たちはこれまで、英語学習が成功するカギを様々な角度から学術的に研究をし、現場で実践をしてまいりました。

その結果たどり着いたのが、語学学習を成功させるカギは「学習者の自律性 (学習者オートノミー) の育成」である、ということです。つまりこれは、学習者が自ら学びをプロデュースできるようになり、学習自体を楽しむことができる力です。自律性の育成には自分自身と向き合うプロセスが欠かせません。自分はどうやってここまで来たのか、これからどうしたいのか、いま何に悩んでいるのか、それをどうしたいのか。こういった問いを自分自身に投げかけ、それを内省することから自律性の育成は始まります。自律性の育成とは単なる語学学習を推進するツールではなく、自分自身を学び、学ぶ姿勢を学ぶプロセスです。英語を学ぶ前に、こうした自己探求、そして学び方を学ぶことが、英語学習を劇的に変える要素になると私たちは考えています。

日本の教育基本法では、教育において「自律の精神を養う」ことが明記されています。文部科学省の改訂学習指導要領にも、「主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング)」の推進が強調されています。

しかし、具体的には私たち教師は何を、どのようにすれば、こうした教育活動ができるのでしょうか。特に、学習者および教育者の「自律性」を養う具体的なガイドラインは、現在の日本ではまだまだ多くは見受けられません。本書は、現場の教師に向けた「学習者の自律性」および「教師の自律性」を促進するための実践ガイドブックです。現場の教師の皆さんが、既存の枠組みの中でも、今日から実践できる具体的なアプローチを紹介しな

がら、学習者の自律性育成の要である「教師の自律性」の育成についてご紹介しています。

本書は以下の2部構成からなります。

〈第1部 学習者の自律性を促す「対話」の基本〉では、自律性促進のカギとなる「対話」に着目します。学習者の自律性は、学習者にスキルやテクニックを体得させることではなく、教師と学習者の関係性の上にこそ成り立つのです。本章では、自律性育成の土台となる教師と学習者の対話のあり方について、12の対話術と具体例を交えて紹介しています。

〈第2部 学習者の自律性を促す「授業」の基本〉では、授業で学習者オートノミーを育成する意義、利点に触れ、学習者の自律性を育成する授業構成について紹介します。既存のカリキュラムに少し工夫を加えることで英語力と自律性の育成の両方を同時に行うことが可能です。またその際に鍵となる教師が授業内で取るべき役割について取り上げ、授業で重要な役割を占める教師の介入についても提示します。今日からさっそく授業で実践できるものばかりです。

本書には、監修者として神田外語大学の関屋康教授とジョー・マイナード教授にご参加いただき、あわせて特別寄稿をお寄せいただきました。関屋先生は、自律学習の有用性を実感されたエピソードを踏まえ、それをご自身の授業でどのように実践されているかについて、自律学習の1つの具体的な実践方法としておまとめいただきました。また、学習者オートノミー研究を国際的にリードされてきたマイナード先生には、自律学習研究が始まった経緯から今日まで、自律学習の過去と現在について、その意義とともにおまとめいただきました。ここに記して感謝申し上げます。また、本書の執筆に関わってくださった、多くの学習者や先生方にも深く感謝をいたします。

最後に、本書の企画・執筆にあたり、何度も対話を重ね、共にこの本を生み出していたいただいた本書の担当編集者、神田外語大学出版局局長の米山順一様に、心よりの敬意と感謝を申し上げます。

多くの方々の思いを乗せた本書が、少しでも、日本の英語教育における学習者および教育者の「自律性の育成」を促すことに貢献し、一人でも多くの学習者がワクワクしながら実りのある学習ができることを願っています。

2021年夏

加藤聡子

山下尚子